

真鍋嘉一郎

夏目先生の追憶

夏目先生の追憶

私が夏目先生と相識したのは松山中学時代であるが、その時代の夏目先生は、先生から俳句を教わった松根君や都新聞にいる山本君や又船田君なぞの方が詳しく知っているだろう。私は只、英語をよく勉強する男というので、先生から認められていただけである。もとより私も、先生をそんなに偉人だとは思わず、只いい親切な先生だと思っていた。中には先生を厳格な怖い人だとばかり思っていた人もあったが、私には少しもそんな事はなかつ

た。

先生は松山中學で四年と五年の英語を持って居られた。

私は先生が松山へ着く早々、殆んど三日目位かに、或る事情のため、或る他の先生を介して、先生の許へ一緒に置いて貰うことを頼み入った位で、先生とは初めから非常に縁が深かった。其時承諾はされたのであったが、不幸にして先生はやがて他の教師と同居するようになり、私は私で他の先生と同居する事になって、教場だけの関係にはなつたが、先生から受けた感化は忘れる事が

できない。

其頃の中学の英語というものは、一体教授法から何か
ら無茶苦茶なもので、三年でラセラスの歴史、四年でヴ
イカー物語、五年でサー・ロジャー・デカバリーをやる
と云った風に、六ヶ敷いものばかりだった。それで有志
のものが、余り六ヶ敷過ぎるから斟酌して呉れるように、
県会議員へ請願した事もあったが、時の教師達は却って
それを不都合とし、又難解なものをやればやる丈力がつ
くなぞと云って、無暗矢鱈に解らぬものをつめ込んだも
のであった。所が夏目先生が来て、スケッチブックを講

義し初めると、不思議によくわかって、英語の面白味が初めて感ぜられるようになった。先生は吾々に四五年を通じてスケッチブックのヴォイエージとロスコーとブロークン・ハートの三章を講義されたが、其講義振りは、机に凭れて両肘をつき、右手に鉛筆を持って、細々と講義を進めて行かれた。能弁とか達弁とか云うのではないが、非常に言葉の綾に富んだ話しぶりで、誠に明快を極め、熱心で正確で、其口吻が当時十七八歳だった自分の頭裡に刻せられて、今だにありあり残っている。先生の英語の教授法は、訳ばかりでは不可ない、シンタックス

とグラムマーを解剖して、言葉の排列の末まで精細に検査しなければならぬと云うので、一時間に僅に三四行しか行かぬこともあった。そのため二年間にスケッチブック三章しか読了しなかつたのである。プレフィックス、サフィックスを始終やかましく云うので、夏目さんのプレフィックス・サフィックスと云って吾々の間に通つていた。私には此の根本的な語学研究法が、後々まで永く感化を残して、いくら役に立ったか知れない。

亡くなられる少し前先生が此処（大学病院内物理的療養所の眞鍋氏が研究室）へ来られた時、私が松山の懐旧

談をして、会々その感化に及ぶと、先生は「そうだったか。僕はそんなに恩をきせたとも思っていないのに、君はそんなに難有く思ってるのか」と云って笑われたが、此の語学研究法は、私が独逸語をやり仏語を学ぶ際にも応用して、大に為めになった。所が私の此の夏目式を、或る独逸語の先生はまるで重箱の隅をほじるようなものだと言ったが、私はこれを以て一生研学の方針としていゝる。啻に語学のみではない。すべてに細く頭を用いる夏目式は、私の医学にまで感化を及ぼしている。

序で乍ら先生の此感化と相並んで、同じ松山時代に式

氏珠山という先生が漢文に於て之と同じ方法を取られたのを、いい対照として私は記憶している。

兎に角かように熱心精確を極めた上に、私なぞには特に親切にして下さつて、私が其頃から医者を目指して、独逸語に手を染めかかっていたのを知っていたため、教室で何か字義を解釈する度毎に語源の説明に加えて、独逸語を引き合わして下さつたりした。今でも覚えているのは、同じアングロサクソン語から出たものとして、Church と Kirche とを揚げられた事なぞの類である。それから又、一度私がスエントンの文典の六ヶ敷しいのを

訴えたら、もつと解り易い文典を代りに教えて下すつて、
「わしに文法も何もかも時間を持たせれば、君等をもつ
と解るようにしてやるのだが」と云われた事もある。発
音なども正確を旨とせられて、皆が *Vicar of Wake-field*
をヴィーカーと云っていたのを、ヴィーカーとなおさせた
のなぞも覚えてゐる。

も一つ面白かったのは会話の時間には初めから英語で
話された事であつた。いつか拳闘の話が出た時私は *not*
を聞き落して、先生から会話の際には先ず第一に肯定否
定を聞きとるのが肝要だと、叱られた事もある。

作文なぞも実に丁寧に熱心に直して下すった。しかも他の教師とはちがいで、教授には充分余力を余している事がわかったため、生徒は全く先生に敬服して、私なぞも大惚れに惚れて了った。而して生徒間にも、あんないい先生が松山なぞへ来たのは、道後の温泉がある故、保養旁々教鞭をとるに過ぎまいなぞと云われていた。事実先生は、毎日半里の温泉まで通ったものである。

俳句は其時分可なり熱心で、試験の時や、作文の間なぞには、教室でも頻りに俳句の本を読んでいた。

共時分の先生の風采は、背広に鼠の中折帽で、いかに

も英学者らしかった。私は先生が初めてフロックに山高を着た時を覚えているが、それは日清戦争が済んで、凱旋軍人の歓迎に出た時であつた。私どもが「似会う」と云つて冷かしたら、先生はにやりと微笑を洩らされた。その様子が今猶私にははつきり思い出される。

ざつと松山に於ける先生の御様子はこんなことで、私が多少語学を根本的にやれたのは、全く先生のお陰であつた。

それ以来先生は熊本へ、私は東京へ、暫らく分れ分れになつて、往来すると云う程でもなかつたが、会えば百

年の知己のように親しく話した。併しその頃は、医師としての私の伎倆なぞはあまり信頼していなかった。廿年程前であつたらう、偶然新橋で会つて、糖尿病に罹つていると云うお話だつたから、後から尿を送つて貰つて検査して、可なり多量にあるのを発見して、注告はしたが、先生はまだ壮年のことではあり、「近処の医者にかかるからいい」と云つたような調子で、余り注意もされなかつた。

その中には私も洋行して来る。谷干城氏の病氣の時に、青山先生の助手として看病したのを知つてから、先生は

初めて私の医師としての存在を認め、爾後臨終の日まで、多大の信頼を以て邁して下すった。

亡くなられる一年ほど前に左手が痛んで困るからと訴えて来られたのが最初で、それが糖尿病のためだと解ると、専心その方の治療に努めて、それは大によかったのであったが、宿病の胃潰瘍のために、とうとう惜しいことをして了った。先生も其頃になって、大いに心細さと自重の念とを起したらしく、私にあてた手紙なぞにも、「老境に近づくに従い心細きことのみ多く」なぞと訴えて来られたこともあり、又十一月の二十三日には、病床

から私を顧みて、「君はもと弱かったが、今はそんなに丈夫になり、僕はもとは丈夫だったが、今はこんな体になつて了つた。僕ももう五十だからねえ」と沁々述懐された。其時私は、「先生も洋行なすつたからにはお解りでしょう。五十といえはまだ西洋人の働き盛りですよ」と云つたら、先生も、「僕もそう思つて力をつけてるのさ」と仰つた。死と云う事は全く予期なさらなかつたように私は思う。

先生の死後、私は会う人毎に、「漱石先生は惜しいことをしましたね」と云われ、又自分でも先生に就ていろ

いろ思い出出しては話していた。何だか今の私の心持は、嘗つて少い時読んだ西詩に海の底に鐘があつて、ふだんは汐騒で聞えぬが、偉人が死んで、一旦波が沈まるとその響が聞えて来る、と云つたように、絶えず先生を愛するの情は、胸の海中にあつても、今まで色々な俗界の風波に響を消されていたが、今その偉人の死と共に、波が静つて、思慕の鐘の昔がいずこともなく鳴り出でて止まぬような思ひである。もし私が文筆の士であるなら、今の此の思ひを、書き残しても見たい。（談——新小説第二十二年第二号より）

日本文学電子図書館

夏目先生の追憶

著 者：真鍋嘉一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館